

2. 塩尻市の維持向上すべき歴史的風致

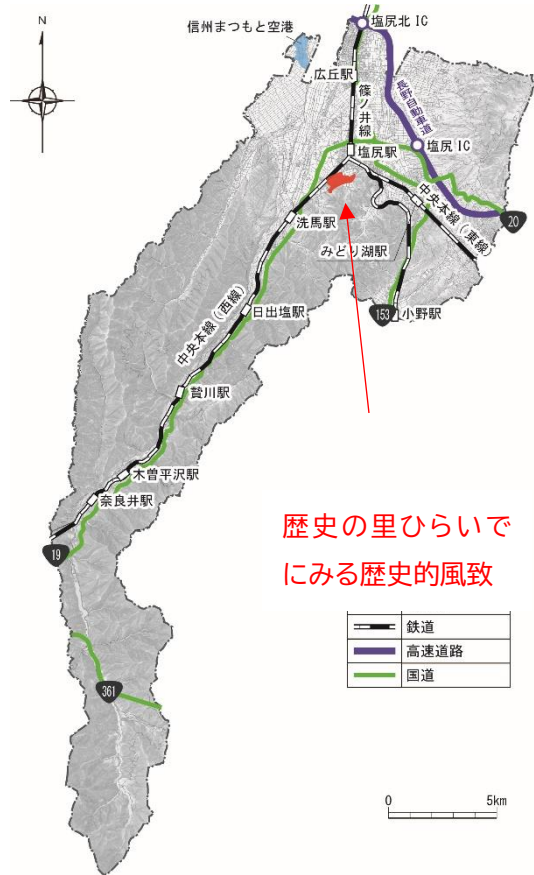
(1) 歴史の里ひらいでにみる歴史的風致

【歴史的風致の概要】

塩尻市の東南に位置する平出地区は、木曾谷から松本平へ流れる奈良井川によって形成された、桔梗ヶ原と呼ばれる隆起扇状地の扇央部にあたっているため、地下水位は低く、ブドウ園を主体とした畑作利用が盛んな地域となっており、縄文時代から現代まで連綿と人々の暮らしが営まれてきた、歴史的資源が集積している地域です。

平出地区の周辺には大河川は無いけれど、平出の泉からもたらされた豊富な水を背景に、平出遺跡において縄文時代早期の人々の生活の痕跡が確認されているほか、古墳時代の平出集落の権力者のものと考えられる平出古墳群や江戸時代に築いたとされる中山道沿いの平出一里塚など、5,000年に及ぶ人々の生活の痕跡を見ることができます。

また古くから人々の生活を支えた平出の泉は、飲用水を始めとした重要な生活用水及び農業用水で、周辺集落の生活を支えるとともに、マイナス10度以下になる冬期も凍らない泉はマガモ等の越冬場所となり、この地域独特の風景を形成しています。



位置図

	歴史的風致	建造物とまちなみ	活動
歴史の里 ひらいでにみる 歴史的風致	1) 歴史遺産にみる 歴史的風致	・ 平出遺跡 ・ 平出古墳群 ・ 平出一里塚	・ 清掃活動
	2) 平出の泉にみる 歴史的風致	・ 平出の泉 ・ ドンド	・ 松飾りなどの風習 ・ 水の管理

1) 歴史遺産にみる歴史的風致

ア はじめに

平出地区の南側一帯には海拔 1,000m 前後の山々が迫り、その一角から分岐した独立丘である海拔 810m の比叡^{ひえ}ノ山がすぐ背後に横たわっています。

この比叡ノ山の東端には年間を通じて絶え間なく水量豊かな湧水がみられる平出の泉があり、湧水した水は渋川の流れとなり、平出集落を貫流し、東方の長田と呼ばれる水田地帯を潤す、恵の泉となっています。

この豊富な水資源を利用して、縄文時代から平安時代にわたり集落が形成され、現在は国指定の史跡の平出遺跡となっています。その後も平出地区周辺には連綿と人々の営みがみられ、江戸時代後期から明治時代にかけて建てられた長野県中南部地方に分布している民家形式の一つである本棟造建物が数多く残され、良好な集落景観を今に残しています。

平出集落北側には中山道が通り、平出一里塚は左右両塚が残されている数少ない一里塚として、中山道を歩く人々にとって当時の風情を感じることができる場所になっています。



平出遺跡発掘作業の様子(昭和 25 年)

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 平出遺跡

平出遺跡に関しては、江戸時代の紀行家である菅江真澄^{すが え ますみ}の著した『伊奈濃中路^{いな の なかみち}』の中で、天明 3 年(1783)のこととして、桔梗ヶ原の一角で石鏃が拾える場所であると紹介されています。昭和 8 年(1933)には初めて発掘調査が実施され、縄文時代 1 軒、古代 3 軒の住居址が発見されています。

その後、昭和 25 年(1950)から昭和 26 年(1951)にかけて、宗賀村により平出遺跡調査会が組織され、國學院大學教授の大場磐雄を調査委員長として考古学・地学・古生物学・建築学・社会学・民俗学・歴史学という多方面にわたる総合学術調査が行われ、縄文時代 18 軒、古墳時代から平安時



遺跡公園(縄文時代のムラ)

代にかけて 49 軒の住居址と掘立柱建物址 3 棟が発見されています。この調査成果により平出遺跡は昭和 27 年（1952）3 月 29 日に国の史跡に指定され、昭和 52 年（1977）には「史跡平出遺跡保存管理計画」が策定されています。

平成 9 年度（1997）から着手された平出遺跡の公有化・整備事業では、「縄文の村」「古代の農村－古墳時代地区・平安時代地区－」の復元整備事業を目指すことになり、平成 14 年（2002）から平成 23 年（2011）にかけて史跡備のための発掘調査が実施されました。これらの発掘調査の成果をもとに、縄文の村地区には生活復元エリアと廃村エリアの 2 つの異なる整備手法がとられています。

生活復元エリアとしては、約 5,300 年前の縄文中期中葉の 7 棟の住居と 2 基の立石が復元整備され、廃村エリアでは、廃棄された集落として上屋が消失してしまった廃絶住居の痕跡と、廃棄された住居内に大量の土器などが捨てられている様子を表現した廃絶住居 2 棟が整備されています。



遺跡公園(古墳時代のムラ)



遺跡公園(平安時代のムラ)

また、古墳時代地区には約 1,400 年前の集落として、集落内でも大形とされる住居 1 棟と平均的な住居 1 棟の計 2 棟の住居と穀物倉庫として使用されたと考えられている 1 棟の高床倉庫という 3 棟の復元建物によって古墳時代の集落形態を表しています。一方、平安時代地区には約 1,000 年前の集落として、4 棟の復元住居と 1 棟の納屋が復元整備され、平安時代集落の中の一つの集団単位としてとらえられる「一戸」の農村景観を再現しています。

このように、一つの遺跡で縄文・古墳・平安時代という 3 つの時代の集落を復元整備している例は全国的にも稀で、平出遺跡公園の特徴の一つともいえ、遺跡公園を訪れる人々が遥か昔の人々の暮らしを垣間見ることが出来るようになっています。

(イ) 平出古墳群

平出古墳群は、平出博物館に隣接する、比叡ノ山の裏側にあたる姥ヶ懷^{うばがふところ}と呼ばれる小丘陵に位置し、3基の円墳によって構成されていることは、昭和31年（1956）刊行の『信濃史料』第1巻上にも記載されています。

1号古墳は、3基ある古墳の真中にある東西22m、南北20m、高さ3mの円墳です。

最も保存状態が良好であったことから、平出古墳群で最も早い、昭和31年（1956）に発掘調査が行われています。隣接する2号古墳が露呈する石室を持っていたことから、1号墳も石室を有する古墳であると予測して調査を実施しましたが、予想外に石室らしい石組はなく、鉄剣と土師器が並んで出土したことから、石室などの施設を持たない素掘りの穴に直接遺体を埋葬したものと判明しています。このときに出土した2振の鉄剣は東西に揃えられて埋められていたことから、被葬者は頭部を東または西に向けて葬られたと考えられています。この古墳の築造時期は、出土した鉄剣や鉄鏃の年代から6世紀中頃と推定されています。



平出1号古墳



平出2号古墳

2号古墳は1号墳の上方13mに位置しています。確認できる墳

丘の規模は、直径10m、高さ1mと小規模な墳丘をもつ円墳で、昭和58年

（1983）に平出歴史公園整備に伴い発掘調査が行われています。天井石が持ち去られていたことから、破壊されつくされているとの想定のもと調査が行われましたが、意外にも天井部と側壁の一部以外は築造当時のまま残されていることが判明しました。掘り上がった石室は、西に向かって開口した片袖の横穴式石室で、玄室の長さは6.45m、幅2m、現存高1.7m、羨道2.7mという大きなもので、これだけの規模の石室は松本平でも最大級の立派なものでした。

石室内はすでに盗掘されていたため、かなりの埋葬品が運び去られたと考えられていましたが、金環・勾玉・小玉などの装身具、直刀・短刀・鉄鏃・刀子などの武具類、轡などの馬具、須恵器・土師器などの土器類など多くの出土品とともに、人骨なども出土しました。6世紀中葉から後半にかけて築造されたと考えられ、遺物や人骨の出土状況から少なくとも4回以上の追葬が行われたことが想定されている平出古墳群の中では最も新しい時期の古墳です。

3号古墳は最も下側に位置する未調査の古墳で、墳丘の西半分が破壊されています。推定径12mの円墳で、破壊時に石材が発見されなかったことから、無石槨の古墳ではないかと考えられています。鉄剣が出土したと伝えられており、6世紀中頃の築造と考えられています。

これらの古墳の被葬者については、古代の平出集落を統治した権力者の墓と考えられており、古墳の築造順については、古墳の構造や出土遺物などから、最も下に位置する3号墳が最も古く、初代首長のものと考えられ、続いてその上に位置する1号墳が2代目首長のもの、そして最も上部の2号墳が3代目首長の時代に築かれ、しかも4代目の首長の時代にも継続して使用されるなど、平出古墳群は6世紀中頃から7世紀中頃にかけての100年間にわたり、平出周辺に君臨した権力者一族が眠っていた場所であると考えられています。

(ウ) 平出一里塚

平出一里塚は平出集落の北側を通る中山道沿いに設けられた、旅人や運送業者に道中の距離を示すことを目的として築かれた塚で、塚には代替わりはしているものの、目印のためや風雨による損壊防止のために植えられたとされる松が残されています。本来ならば一里塚は平出一里塚のように道路の両側に塚が設置されていたはずですが、他の多くの一里塚の場合その後の開発により破壊され、この平出一里塚のように両塚が残されている



平出一里塚(南側)



平出一里塚(北側)

ものは貴重であるといえます。

このような一里塚が全国的に整備されたのは江戸時代になってからのことで、『慶長見聞集』によれば、江戸幕府は慶長9年(1604)に江戸の日本橋を起点とし、36町を1里として一里塚を設置したといえます。『徳川実記』にも慶長9年に一里塚を築かせたと記されています。また『若葉集』には慶長17年(1612)に東海道・中山道の塚が完成したと記されており、工事は9年ほどのうちに完了したとみられています。

しかし、中山道は慶長19年(1614)以降に牛首峠を通る旧中山道から塩尻峠を通るルートへと変更しており、新ルートに位置している平出一里塚は、ルート変更後に設けられたと考えられることから、この頃に築かれた塚であると考えられています。

(エ) 伊夜彦社

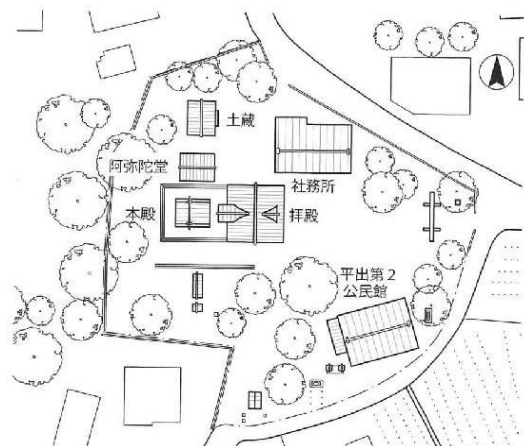
伊夜彦社は、平出集落の中央、平出の泉東方に位置しています。旧社格は村社で、天香護山命あまのかぐやまのみことを祀っています。東を正面として、鬱蒼とした鎮守の森の中には明治25年(1892)の石造控え柱付の明神鳥居、前庭を挟んで平成6年(1994)に建て替えられた拝殿が、拝殿後方にはコの字に玉垣によって囲われた本殿があります。この本殿は縁まで一連の土台上に建つ一間社流造、銅板葺の社殿で、棟札から文化14年(1817)に、江戸時代後期の名工と謳われた立川流二代の立



伊夜彦社配置図



集落の鎮守伊夜彦社



伊夜彦社本殿

川富昌によって建てられたことが分かっています。

ウ 活動

(ア) 平出児童会の清掃活動

平出児童会は、昭和の初め頃から平出区全体として子供たちの集いが組織化され、小学校3年生から高等科2年までの生徒を主体に少年団として活動が始まったことに由来しています。昭和16年(1941)4月には、国策により統制化された宗賀村青少年団が結成され、平出区においても平



子供たちによる清掃風景（昭和30年代）

出青少年団が発足し、昭和17年(1942)9月に青少年団団旗並びに分団旗が交付され、昭和18年(1943)3月には伊夜彦社で入魂式が行われています。このように少年団のまとまりが強化され、子供たちの団結心と仲間意識が育まれるとともに、地域への愛着などから毎週日曜日に村社である伊夜彦社や付近道路の清掃が行われるようになりました。

しかし、戦争の終わりとともに学制改革が行われ、国をあげての青少年団活動も終結を迎え、少年団活動は終わることになりましたが、地区内の清掃活動や伝統的な行事などは戦後発足したPTAなどの指導による児童会に引き継がれることになりました。

そして、昭和29年(1954)に平出博物館が建設されると、それまで伊夜彦社を中心に行われていた清掃活動の場が平出博物館や平出遺跡、平出の泉へと広がりを見せ、故郷の誇りともいえる歴史・文化遺産や素晴らしい景観を守る活動へと繋がっていきました。

このような児童会の清掃活動が評価され、昭和40年(1965)1月1日には、平出児童会が塩尻市長から表彰を受けています。

現在でも毎年6月から11月にかけて、小学1年から6年生までの児童約50人により、月1回平出博物館や平出



子供たちによる清掃風景（令和5年）

遺跡公園周辺において清掃活動が続けられています。

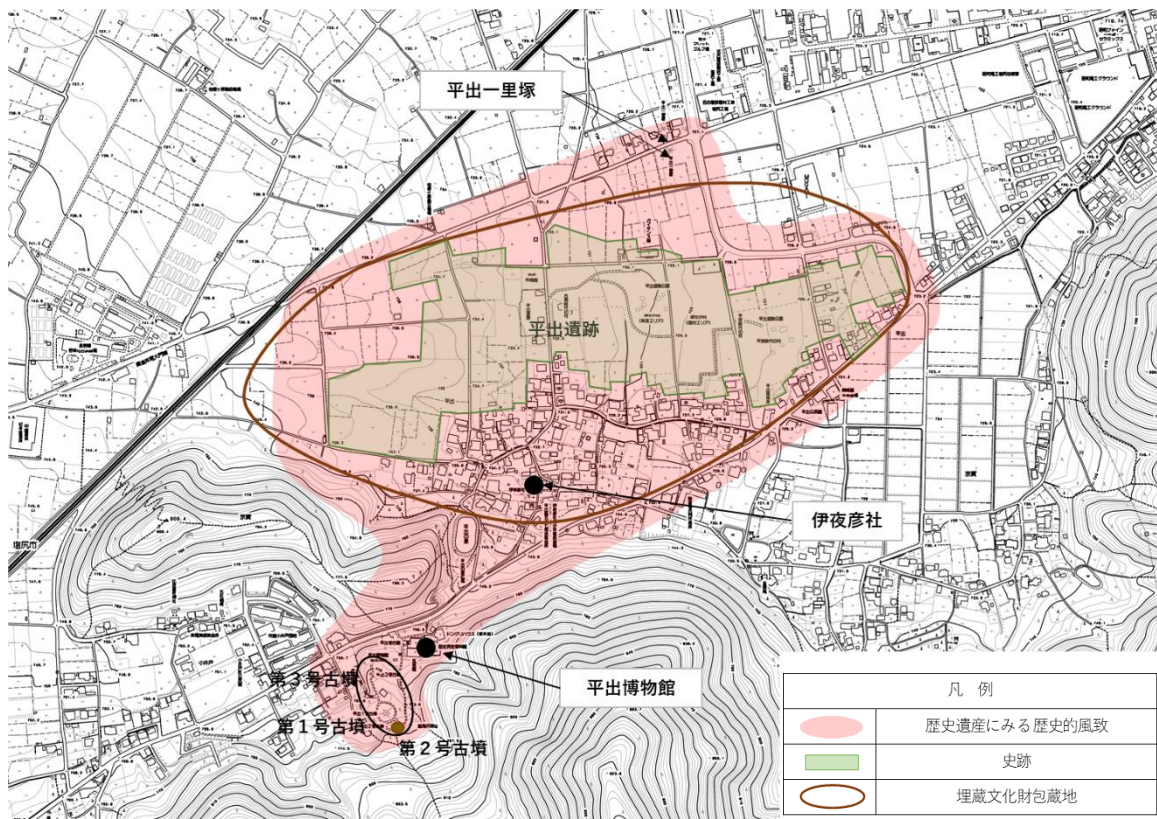
(イ) 平出老人クラブの奉仕活動

昭和 33 年（1958）に松本で開催された「老人のしあわせを守る研究会」において、各市町村で老人クラブをつくる申し合わせがなされました。その後、9月15日の「としよりの日」を中心に行われた「としよりの福祉週間」を契機として、宗賀村内でも平出・本山・床尾・洗馬・牧野・日出塩の各区で老人クラブの結成式が行われました。平出区については、昭和 33 年（1958）9月10日に平出公民館において平出老人クラブの結成式が行われたと老人クラブの記録簿に記載されています。この平出老人クラブの活動の一環として、奉仕活動である公民館や集荷所、遺跡公園駐車場周辺の除草等の整備作業や花壇への花苗の植え付けや管理作業などが行われており、これら活動が地域の環境美化に一翼を担っています。このような活動が評価され、昭和 50 年（1975）3月に塩尻市教育委員会より表彰を受けています。平出老人クラブによる平出遺跡公園周辺における花壇の整備などの奉仕活動は、令和 5 年 3 月末で平出老人クラブが解散したことによりクラブとしては行われなくなってしまいましたが、その活動は地元平出区の活動として引き継がれ、途切れることなく現在でも行われ、遺跡公園周辺の景観は良好に保たれています。

エ まとめ

平出地区にある国の史跡である平出遺跡内には、縄文時代、古墳時代、平安時代という 3 つの異なる時代の住居や高床倉庫などが復元されていますが、それだけでなく、縄文集落の背後には三角形の形状をした大洞山が控え、古代においては同じく集落の背後に独立した丘陵で神奈備山と考えられている比叡ノ山などが横たわり、背後の山の尾根には村を支配したであろう権力者の墓も残っているなど、居住域としての生活の場だけでなく、信仰の対象としての山々なども含めた、当時の人々が見たであろう景観を現代でも見ることができるという、過去と現代がクロスオーバーしたこの地ならではの特色ある歴史的風致を形成しています。

これらの地域に残された他にはない景観を含めた地域遺産を後世へ守り伝えていきたいという強い思いから、平出児童会や平出老人クラブなどによる地域ぐるみの清掃活動や花壇づくりなどの美化活動が長い年月にわたって続けられ、歴史遺産を活用した良好な歴史的風致が維持されています。



歴史遺産にみる歴史的風致

2) 平出の泉にみる歴史的風致

ア はじめに

松本平南端、木曽山脈北端にあたる大洞山北西の山地と比叡ノ山の端に挟まれたところに位置する平出の泉は、周囲の山々に降った水が伏流水となり湧き出している湧水地で、泉から流れ出す小河川である渋川（平出集落では「カワ」と呼ばれる）上流域には、縄文時代から平安時代にかけての大集落として知られている平出遺跡が南北 300 メートル、東西 1 キロメートルという広範囲にわたり広がっています。また、平出の泉から流れ出す水は、平出集落南側にある^{ちやうだ}長田といわれる良質な水田地帯を潤す命の水とも言える役割を果たすなど、この地域において今も昔も欠くことのできない水資源を提供し続けています。

このように平出地区に暮らす人々にとって貴重な水資源をもたらす平出の泉やそこから流れ出す渋川が特別な存在であることは、地域に語り継がれている次のような伝説からもうかがい知ることができます。

一つ目として、神様が乗った牛が動かなくなったため、付近の水を集めて牛に与えましたが、その甲斐なく、そのまま泉の脇で石と化してしまったことを契機に、他の地に行くことをやめて平出の地を住みかとして開拓することにした「平出の泉」という伝説があります。

二つ目として、隣村の床尾地区から蟹が平出地区まで穴を掘ったおかげで、床尾地区の水が平出地区へ抜けてしまい、床尾は水便が悪く、平出は水利が非常に良くなったということから、平出では渋川に住んでいる蟹を食べてはいけないといわれるようになったという「平出の蟹」の伝説が残されています。

イ 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 平出の泉

平出の泉は、平出集落南西の比叡ノ山と呼ばれる独立丘陵の東端に位置する、周囲 200m、水深は最深部で 6 m を測る透明度の高い湖沼です。現在のような堤の形状は、江戸時代に貯水を目的に築かれたものとされていますが、塩尻市のため池台帳には、明治 20 年（1887）に築造されているという記載がみられ



平出の泉

ます。この泉の付近には珪質頁岩^{けいしつげつがん}や粘板岩などの堅い地層の間にレンズ状に介在する石灰岩の露頭が見られ、泉の水はその割れ目などから湧き出しています。湧水量は毎秒 45 リットルで年間を通じてほぼ一定で、水温も年平均 13 度ほどとなっています。外気の変化と比べて水温の変化が少なく、泉の水は冬でも決して凍ることがありません。

この湧水の供給源としては、背後の山が持つ集水面積に対して湧水量が多いことや湧水量に季節的な変動があまり見られないこと、また周囲に鍾乳洞^{たぐわ}の存在が知られていることなどから、大量の水を蓄える地下洞^{かんがい}の存在を考えることが妥当であるとされています。水質としては、pH8.2 とアルカリ度が市内の湖沼のなかでも突出しています。これは石灰岩の中を水が通ってきたことに起因していると考えられています。灌漑施設^{かんがい}がなかった古代の集落にとっては、付近一帯に広がる pH5.5 の酸性火山灰土壌に対して大きな灌漑効果があったと思われ、実際に渋川流域の長田と呼ばれる水田地帯の土壌は pH7.0 と周囲の土壌と比較しても中和されていることは明らかです。

(イ) ドンド

平出の泉を源として平出集落を流れる渋川沿いには、「ドンド」「ドドンビキ」「ドドンブキ」などと呼ばれる水汲み場兼洗い場があり、地域住民の生活の場として活用されています。呼び名としては「ドンド」が最も一般的です。



ドンドは渋川上流の集落域にあり、32 か所で確認されています。これらのドンドは基本的に家と対の関係で設けられており、それぞれの家の敷地入口に最も近い場所のドンドを利用することが一般的ですが、ドンドから離れた場所に屋敷を構える複数の家で利用されている例や街路を挟んで向かい合う2戸が併用する事例も見られます。

ドンドの構造は、1段ほどの段差を設けて足場としていることが多く、道路等の地盤面と足場との比高差は約10センチ、足場と水面との比高差も約10センチと非常に平面的な水場となっています。このようにドンドが非常に平らな空間である要因としては、平出の泉の湧出量が安定しているうえに、氾濫の危険性が低いという平出の泉の特性があげられます。

ウ 歴史的風致を形成する活動

(ア) 水の利用

平出の泉に端を発し、平出集落の中心を貫流する渋川は、古来より灌漑用水として下流の長田と呼ばれる水田を潤してきました。一方で、泉に近い平出集落ではその渋川の各所に「ドンド」と呼ばれる簡易な施設を設け、飲み水を汲んだり洗い物をしたりしながら生活をしていました。



集落を流れる渋川

昭和35年（1960）の上水道の整備等により渋川への依存度は低くなったものの、現在も生活に欠かせない一要素として利用され続けています。

渋川の水は、上水道が整備される以前は、飲用、炊事、風呂、洗濯、農機具洗いなど生活の様々な場面で利用されてきましたが、これらの水の利用に関しては集落内で決まり事があったようです。

飲用や炊事用の水については、泉に比較的近い上流域の住民は、各戸の前のドンドではなく、泉に最も近いドンドに水を汲みに行っていました。その際水を汲みに行くのは女性や子供の役割で、1日に1から2回、夕方に汲みに行くことが多かったようで、汲んできた水は玄関などに置いた大型の水甕に貯水していました。一方、泉から遠い集落の住民は、各戸の前のドンドで汲んでいましたが、水を汲むのは水が澄む夜間に行い、水甕に貯めて翌日利用したということです。

風呂や掃除、散水などの用途に使う場合は飲料水ほどデリケートな扱いは行われていませんが、渋川の水質を保つ必要があったため、おむつなどは洗ってはいけないという不文律や渋川の中での魚の飼育も禁止されるなど、水質保全に関しては地域ぐるみで取り組まれていました。

上水道が整備されている今では、渋川の水を飲用水として利用している家庭はありませんが、畑で収穫した野菜を洗ったり、夏にはスイカやビールを冷やす光景を目にすることができます。また、10月から11月にかけては、地区住民だけでなく他地域からも人が訪れ、畑で根を切り落とした野沢菜をドンドで「お菜洗い」する姿も見受けられ、晩秋の風物詩にもなっています。

季節限定の川の利用としては、年末年始の正月行事の一環としての松飾りがあげられます。家の玄関に松を飾るように、12月28日もしくは30日にドンドに松を飾り、水神様を祀っています。松には、注連縄^{しめなわ}と紙垂、藁で作る小型の入れ物であるオヤスがつけられており、正月7日に片付けられた松飾りは無病息災を願う正月行事である三九郎（「どんど焼き」ともいう）で焼かれます。これは、昭和30年（1955）刊行の『平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究』には、「泉の水を各自の家に引込んでドドンビキ（水汲み場）を設け、そこにお水神様と称して皮をむいた小さな松の木を立て、それに松を縛りつけて祀るなどして、この水利に生活を託している」という記述があることから、少なくとも70年以上続き、情緒豊かな景観を今なお残しています。



ドンド(正月の松飾り)



ドンド(夏の様子)



ドンド(初冬のお菜洗い)



ドンド(畑で収穫した野菜を洗う)

(イ) 水の管理

水の管理に関しては、昭和 30 年（1955）刊行の『平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究』に、「この流れを汚さないように心掛けるのは、村の人々にとっての不文律で・・・この川掃除の始められたのは昭和 25 年頃からとのこと・・・」という記述がみられることから、遅くとも戦後間もない頃には既に泉の水を管理するための清掃活動が恒常的に行われていたことが分かります。

平出の泉の水利権は長田水系の田の水利組合にあり、60 名ほどの組合員がいます。この組合員を中心に 3 月初旬の田仕事前と秋の年 2 回、水路の清掃作業を行うとともに、12 月には、泉の水を抜いて泉の底石についた藻などを取り除く清掃活動も行われ、このときには絶え間なく水が湧き出している様子を目の当たりにすることができ、又とない機会となっています。



泉の清掃作業

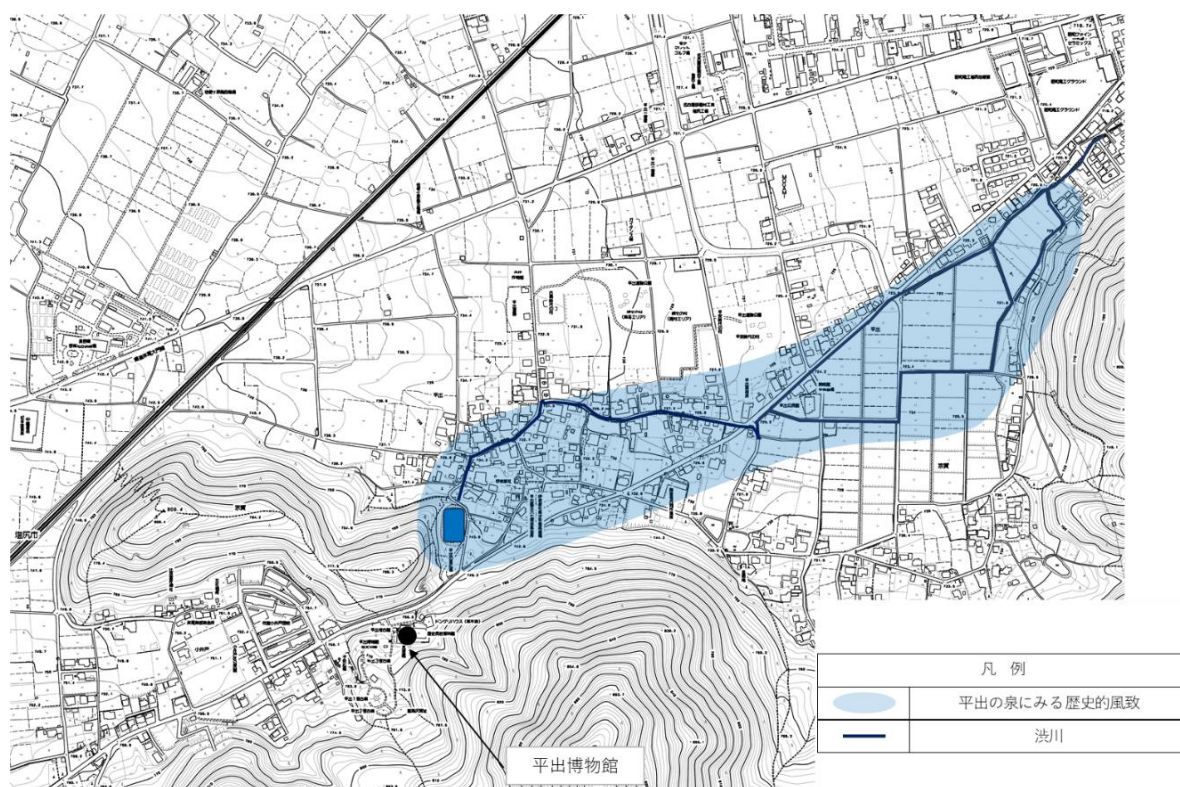
エ まとめ

平出の泉から供給される水は、年間通じて安定した水資源を提供するうえ、大河川と異なり氾濫による災害の可能性も少ない平出集落にとってまさに命の水と言っても過言ではなく、この平出の泉の貴重な水資源を地域の人々が

一丸となり将来へと守り繋げるという姿勢が今もなお見られます。

また、貴重な水資源という側面だけでなく、平出の泉とそこから流れる小河川である渋川を取り巻く良好な環境を残したいという思いから、敢えて河川改修の際にもコンクリートなどを用いた水路とせず、出来るだけ石組みなど伝統的な手法を用いるなど、景観保全に配慮した取り組みが行われています。渋川沿いの堀に関しても、ブロック堀ではなく、なるべく生け垣や板堀など伝統的なものにするなど、地域住民の故郷の原風景を後世に残していきたいという心意気を感じられます。

平出集落の人々は、平出の泉の水とともに生活し、水や自然への感謝の念を抱きつつ、「正月の松飾り」「夏に川でスイカを冷やす」「晩秋にお菜を洗う」など、季節ごとの風物詩ともいえる風情が今でも残り、泉と川と地域住民により形成された里山を舞台とした良好な歴史的風致が形成されています。

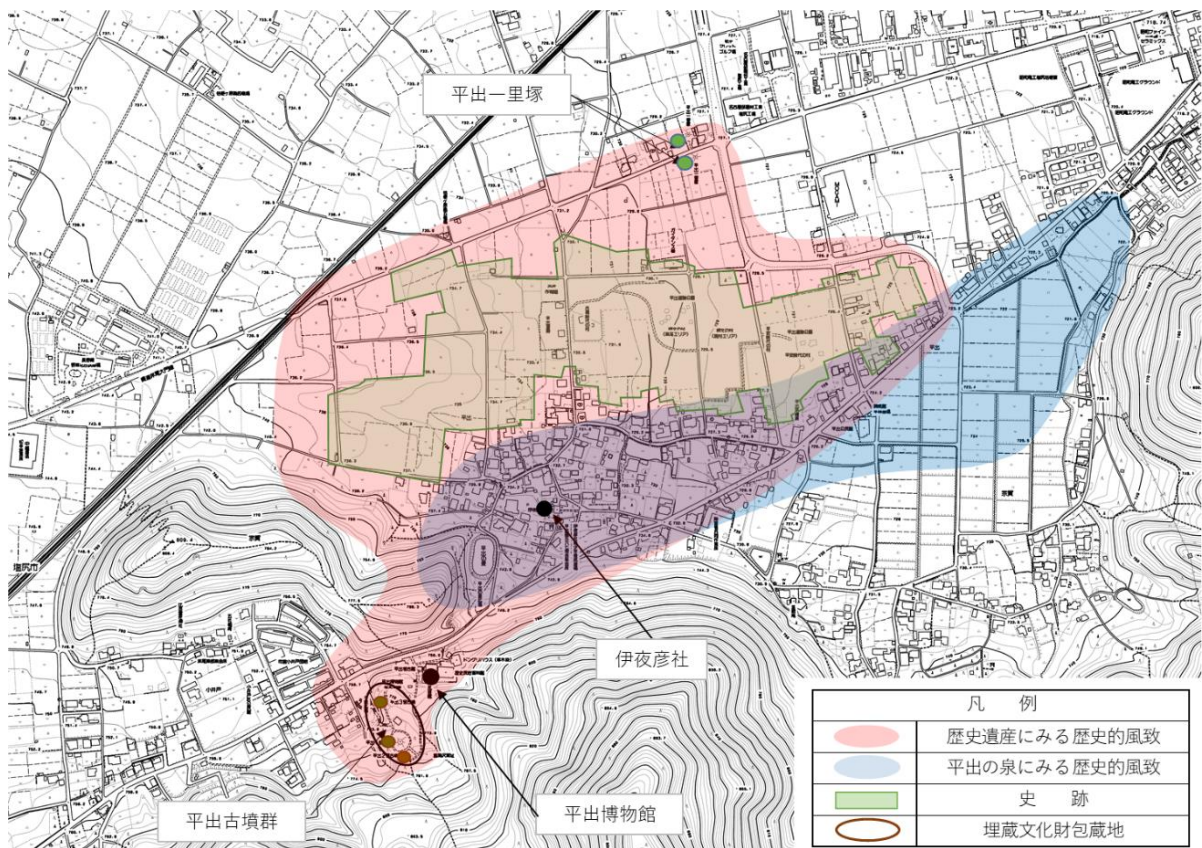


平出の泉にみる歴史的風致

3) まとめ

歴史の里ひらいでにみる歴史的風致は、平出遺跡や平出古墳群、平出一里塚といった文化財の要素を多分に含んだ「歴史遺産にみる歴史的風致」と平出の泉やドンドといったそこで暮らす人々の生活に直結した「平出の泉にみる歴史的風致」という二つの歴史的風致によって構成されています。

これらの歴史的風致は、どちらか一方だけでは歴史の里ひらいでを語りつくすことは困難で、それぞれの歴史的風致が結びつき、更にそこで暮らす人々の地域への深い愛着が要因となり、良好な歴史的風致を形成しています。



歴史の里ひらいでにみる歴史的風致